音楽はうねりとコミュニケーション

神原雅之先生

神原 雅之（かんばら まさゆき）

1952年広島県生まれ。国立音楽大学教育音楽学科第Ⅱ類（リトミック専攻）卒業、広島大学大学院学校教育研究科修了（教育学修士）。現在、国立音楽大学教授、広島音楽アカデミー主事ほか。日本ダルクローズ音楽教育学会理事，日本音楽教育学会会員，日本保育学会会員ほか。公民館・幼稚園・保育園等の幼児教育講座や親子教室、教育委員会等の音楽授業講座の講師としても活躍中。主な著書『ダルクローズ教育法によるリトミック・コーナー』（共著、チャイルド本社）、『リトミック研究の現在』（共著，開成出版），『日本音楽教育事典』（共著，音楽之友社），他。訳書『音楽的成長と発達』（共訳，渓水社），『リズム・インサイド』（共訳，西日本法規出版）。個人ウェブサイトhttp://www3.to/mahsa/

「新し物好き」とおっしゃる神原先生。それは、今なおいろいろなことにチャレンジされているご様子をよく表わしています。先生の、人に対するあたたかい眼差しを随所に感じたインタビューをお届けしたいと思います。

アンサンブルが大好き

先生と音楽の出会いはどのように始まりましたか。

神原　初めて、「ピアノを習ってみない？」と母から言われたのは小学校1年生の時です。新し物好きの僕は「面白そう、やってみる」と言って近所の小学校の校長先生のお宅へ通うようになりました。

当時、ピアノを習っている男の子は少ないのではないですか？

神原　珍しかったですね。家では足踏みオルガンで練習、電動オルガンが素敵に見えた時代です。

音楽に理解のあるご家庭だったのですね。

神原　父も母も歌を歌うことや、音楽そのものは好きでしたね。ピアノがうまく弾けるかどうかということについては何も言いませんでした。両親は専門的に音楽の勉強をしていないので、僕の思うようにさせてくれました。継続することが大切だという思いだったようです。何でも続けるということは大変なことで、すぐ壁にぶち当たり、大体そこでくじける。母は「やめないで続けるんだよ」と。最初からそういう約束だったので、やめるにやめられなかった。不出来な生徒でしたから、バイエルを終えるのにもかなりの期間弾いていました。

お母様の温かい見守りの中で継続されて…。

神原　叱咤激励されながら…（笑）

ピアノ以外の楽器への興味はいかがでしたか？

神原　中学校から高校まで吹奏楽部に入り、トランペットを吹いたり、ユーフォニアムを吹いたりしました。新し物好きだから色々持ち替えては演奏していました。並行してピアノも習っていました。

音楽大学への進学を考えたきっかけは何ですか？

神原　ユーフォニアムが好きで、高校1年生頃は内心ユーフォニアムで音大を受験しようと思ったの。でも体が華奢なので将来を考

えた時に、教員養成の学科を目指すことにしたのです。

卒業後は教員になりたいと思われたのですね。

神原　そう。それは小学校の時のピアノの先生との出会いが大きかったと思います。僕は練習しない不出来な生徒でしたが、先生は一緒に連弾して下さったり、身近な曲を編曲して、「あなたはピアノ、あなたはリコーダー、あなたは鍵盤ハーモニカをやりなさい」と他の仲間と一緒にアンサンブルをさせて下さったの。それは楽しかった。

レッスンは、何人かの生徒さんと一緒に受けたのですか？

神原　個人レッスンでしたけど、待っている人とアンサンブルする機会を時々に作って下さった。不真面目なやつにはこういう方法がいいだろうと、先生が工夫して下さったんですね。

音楽の先生になりたいという下地が出来上がったのですね。ご両親は何と言われましたか。

神原　親父は代々続いている石工なんです。僕は長男で、近所に住む叔父達が毎晩来て、「おまえは後継ぎだぞ」と言われるし、高校の先生には「音大は無理だよ」と言われるし、八方塞がりでした。でも音楽が好きで「音楽をやりたいからやらせて」と頼んだの。しばらくして、親父は諦めたのか、「ことんやれ」と追い風になってくれました。とても感謝しています。

国立音楽大学の受験講習会に来られましたか？

神原　「あさかぜ」という夜行列車に乗って、初めて広島から上京しました。講習会はすごく新鮮で、音楽ってこんなに深みがあるんだ、こんなに科学的なんだと。

科学的？

神原　科学的だと思ったの。音楽は情緒的な面も濃いけど、例えば和声学でも、音楽聴取の仕方でも情緒の裏に必ず原理原則があるんだな、と実感しました。それで国立音楽大学に受かったらいいなと思うようになって、目標が焦点化された感じでした。国立は自分の波長に合う、そんな気がしました。

高校の先生に「ダメだよ」と言われても…。

神原　なにくそ！と思ってね。合格した時は嬉しかったですね。

合唱団で仲間と一緒に

どういう学生時代でしたか？

神原　東京には親戚も知人も全くなかったんですよ。それで、すぐにホームシックにかかっちゃったの。丁度その頃、「イリス合唱団」に入ったの。歌うというトレーニングもこれまで殆どしてこなかったものですから、合唱もやってみたいなと思って。また新しもの好きでね(笑)。佐藤公孝先生の指揮で、ポリフォニックな作品から現代曲までいろんなジャンルの曲を歌いました。当時、合唱行脚というのがあって、1年生の夏から演奏旅行に行きました。そこで仲間と一緒にアンサンブルすることの醍醐味を体験しました。これも楽しかった。

高校時代と違いがありますか？

神原　第一印象は、やはり大学生は高校生とは自治力が違いますね。一人でやれば、合理的に能率的に早く終わるけれど、それでは仲間と一緒に何かをするアンサンブルの体験は希薄になります。(サークルの運営を通して)分け合うとか、支え合うことの大切さを学ぶことが出来ました。(3年次にはイリス合唱団長をしましたが)この経験から、団長が右とか左とか指示するのがいいのではなくて、メンバーの気持ちを引き出して、その思い(民意)を結実させることが、アンサンブルでは大切だということを学びました。

このアイデアは、授業運営の考え方にも通じているように思います。先生がグイグイ引っ張っていくという授業も頼もしいですけど、そうではなくて、子ども達が自分の思いを出し合い、子ども達自身が学習を発展させていくような授業ができたらいいな、と考えています。

リトミックの体験から

どんなことが大学の授業で印象に残っていますか？

神原　即興演奏ですね。先生方や先輩が奏でる即興演奏に目から鱗、ホント驚きました。それまでのレッスンでは、楽譜に書かれたものを正確に再現していくのが音楽だ、というような未熟な関わりしか持てていなかった。いわゆる演奏者も創造者であるということを教えられたのが、即興演奏という取り組みだったと思います。

リトミックの授業はいかがでしたか？

神原　リトミックの様々な体験から、音楽って何なんだろうという大きな課題にぶつかった気がします。つまり、演奏は創造するセンス抜きには成り立たないし、人の気持ちを揺さぶるような音楽表現はできないなと感じました。

リトミック教育の板野平先生についてお聞かせ下さい。

神原　板野先生は大学に入って初めてお目にかかったのですが、同郷ということもあり、今もずっと可愛がって頂いています。寛大な心をお持ちの尊敬する先生です。重みのある言葉に、私はいつも頷くだけです。

住み込みの教員生活

卒業された1976年頃は就職が大変な時代でしたね。

神原　就職難でした。4年生になって板野先生が「神原君、どうするの？」と。「広島へ帰って中学校の教員採用試験を受けようと思います」と言ったら、「採用試験は難しいよ」って。僕ね、巡り会う人、巡り会う人、みんなにだめだめって言われるの。でもこれまでのジンクスみたいなところがあってね、難しいかもしれないけれどチャレンジだけはしてみようと。無鉄砲？

結果的には大学の教員になられたのですよね。

神原　板野先生の推薦もあり、故郷広島のある短大の非常勤講師（音楽リズム担当）として赴任しました。でも非常勤講師じゃ生活できない。すると、その短大理事長（故武田ミキ先生）が素敵なおばあちゃんで、「学園に住み込みで仕事をしなさい。家賃が要らないし、寮から食事を取れば食費も安く済む」と。寮内の一部屋を空けて下さった。

特別待遇ですね。

神原　そう。田舎の良さの中にズッポリ入っちゃった。（笑）

ニューヨーク、サマースクールで

念願の先生になられた感想はいかがでしたか？

神原　いざ教壇に立ってみると、いかに自分が不勉強かということをまざまざと感じました。そこで一念発起、外国でどうやってるのか見てみようと思い、1978年の夏休みに2か月ほどニューヨークに行きました。

ニューヨークを選んだ理由は何ですか？

神原　一つは板野先生がニューヨークで学ばれたので。ちょうどタイミング良くダルクローズ・スクールでサマーセッションをやっていたんです。

どういうことをされたのですか？

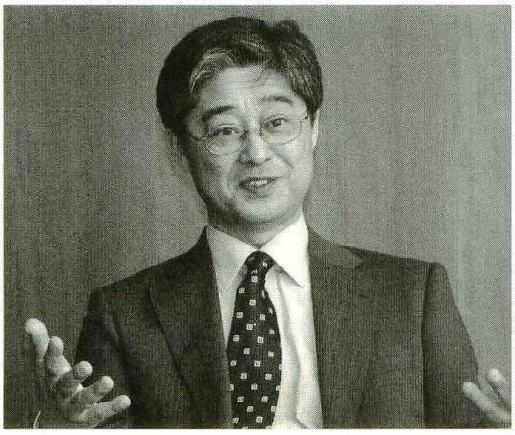
神原　午前中はリズム運動とソルフェージュと即興演奏。昼はちょっと休んで、午後からまたリトミックを3時間。夜のクラスもありました。せっかく遠くから来たのだからということでこれら全部のクラスに出ました。動きも演奏もとても音楽的だったことが印象的でした。

参加者は何人ぐらいですか？

神原　20～30人位。いろんな国から参加していました。僕は、言葉が不自由でうまくコミュニケートできなくてまたホームシックにかかってね（笑）。でも音楽しているときは幸せでした。

言葉が違うと文化も違いますしね。

神原　普段の会話でも音楽でも、みんなコミュニケーションの取り方がダイナミックなんですね。日本人との違いをまざまざと感じました。



シャイじゃいけないと。

神原　そう。アメリカ人は女性も男性も非常に逞しい。音楽もとても逞しく感じましたね。で、このエネルギッシュな部分を音楽授業の中に取り込めないかと思いました。一方、日本で勉強しても、世界の水準に届くかなりのところまでは可能だな、という実感も味わったのね。音楽漬けで、すごく幸せな一夏でした。

片手に辞書を、片手に鍬を

ほどなくして広島大学大学院へ入学されましたが、教えながら学ばれたのですか？

神原　そう、そこも異例なのね。武田ミキ先生は貧しい家庭で苦学された方でした。その分、非常に期待もかけられましてね。とても有り難かった。

広島大学での研究テーマは何だったのですか？

神原　研究の題目は「幼児・児童のリズム能力の発達に関する研究」でした。つまり、リズムを認知する能力の成長・発達はどうなのか、いろんな実験をしました。実験してみると、3歳頃と、6～7歳、あるいは9歳頃に音楽的発達のエポックがあることがわかったんです。それは自分にとっても

大きな驚きだった。だから3歳と6歳とは同じやり方では、子どもには伝わらないという根拠になるわけです。では、何が違うのか、という新たな課題に目が向くようになるのね。こうした研究の蓄積から、音楽教育では、子どもが今持っている力をどうやってひき出していくのか、その環境をどう整えるかということが重要だということにも気づいたんです。

理論的に深められたわけですね。

神原　その実験では、当時まだ目新しかったパソコンを使いました。BASICのプログラミングを勉強して、オリジナルの実験用ソフトも開発しました。

音大の時とはまた違ったアプローチをされて。

神原　他にも文献検索のノウハウや、何かをまとめる作業のイロハを教わったような気がします。

先生は著作の他に翻訳も多く手がけていらっしゃいますが、翻訳する本はどのように選択されますか。

神原　2002年に出版した『リズム・インサイド』は、前年にシアトルで開催された音楽教育講座で、著者のジュリア・ブラック教授に巡り会ったのがきっかけでした。この本素敵だな、音楽教育に対する新しい視点が紹介できるなあと思って翻訳したのです。

短い期間で翻訳されていますが。

神原　翻訳物は、早く活字にしないと、新鮮味が失せてしまいますからね。邦訳することができて、大きな喜びと勇気を貰ったような気がします。論文も同じなのですが、活字にすることで、自分の興味や思考の軌跡をきっちりと確認できますね。大学院時代に、教育と研究は両輪だという価値観に触れました。つまり、「片手に辞書を、片手に鍬を」という姿に一歩でも近づけるように、という思いなんですよ。

教育に研究にご多忙を極めておいでと思いますが、なごやかな先生のご様子を拝見すると怒ったりされないんだろうなあと…。

神原　卒業して間がない頃、計画したように授業が展開できなかったり、子ども達がうまく反応してくれないと、イライラしたり、落ち込んだりしました。その時に怒ったりすると、雰囲気悪くなるでしょ。そうしたら音楽の授業はそこで壊れちゃうんですよ。せっかく蓄積してきたのに、またゼロから始めなくちゃいけない。そのゼロになるのが怖いのね（笑）。それで、怒った方が負け、という思いが強くなったのね。（特に幼い子どもの場合）命にかかわることは躊躇しないで手を出すけど、そうでなければ話せば分かりますよ。

音楽のもつ意味を

ところで、音楽以外で興味があることは何ですか？

神原　メカ好きですね。コンピュータも好きだし、車もカメラも好き。好奇心旺盛なのは幼い頃からです。インドア派ですが、旅行やウインドウショッピングも好きです。

昨年から国立音楽大学に赴任されていかがですか？

神原　音楽に触れながら日々過ごせることの喜びを感じています。

学生の反応はどうですか？

神原　総じて音楽学生は、気付く力、感じ取る力が秀でているなと思います。これも音楽の力かな。

今後のことについて、お聞かせ下さい。

神原　音楽教育には時代を超えて変わらないものと変化するもの（不易流行）があります。不易の部分は、音楽に含まれている「うねり」と「コミュニケーション」にあると考えています。一方、流行の部分は、生活スタイル、価値観など実に様々ですね。音楽教育の方法は、そうした子ども達のあるがままの姿を読みとることが欠かせません。このような観点から、今後も、幼児期から始まる音楽体験の不易流行について模索していこうと思っています。

きょうはありがとうございました。

おすすめの本

◆キース・スワニック著、塩原麻里・高須一共訳『音楽の教え方―音楽的な音楽教育のために―』（請求記号●J103-575）多くの事例を基に構築された音楽学習の枠組みは、私たちに多くの示唆を与えています。

◆ヨン＝ロアル・ビョルクヴォル著、福井信子訳『内なるミューズ（上・下）』（請求記号●C64-063、C64-064）私たちにとって音楽はどんな存在なのか、初期の音楽体験の意味について問う一冊。ミューズは、幼い身体の中に宿っていることに気づく。

◆アントニー・ルーリー著、有村祐輔訳『内なるオルフェウスの歌―占楽が教えてくれるもの』（請求記号●C60-C96）私たちは誰に向かって音楽を演じているのだろうか。ここにも真のミューズの姿をかいま見ることが出来る。

◆ジュリア・ブラックほか著、神原雅之ほか訳『リズム・インサイド』（請求記号●L96-825）音楽を演じるとき、私たちの体内にどんな変化が生じているのだろうか。音楽が果たす教育的意義について明らかにした一冊。セラピー、音楽教育者に是非とも読んでいただきたい一冊。

◆正高信男著『子どもはことばをからだで覚える』（請求記号●J105-425）

◆正高信男著『0歳児がことばを獲得するとき』（請求記号●J105-424）幼児の言語獲得の過程の中に、音楽的センス獲得のヒントが隠されています。

◆中島義道『対話のない社会』（請求記号●J105-426）子どもを取り巻く社会の病巣について考えさせてくれる一冊です。私たちには何ができるのでしょうか。

●すぎおか　わかこ　構内の泰山木が白い花を咲かせていました。植物画を再開したい気持ちはあっても、一度中断するとなかなかできないものですね。「継続は力なり」を痛感しています。